

● 適用条件

高さ60mを超える超高層RC造建物において、表の適用範囲に対応する場合に適用できます。高層評定用資料「アジャストビーム構法 設計施工指針」に倣い、設計・施工を行います。

● 構造性能

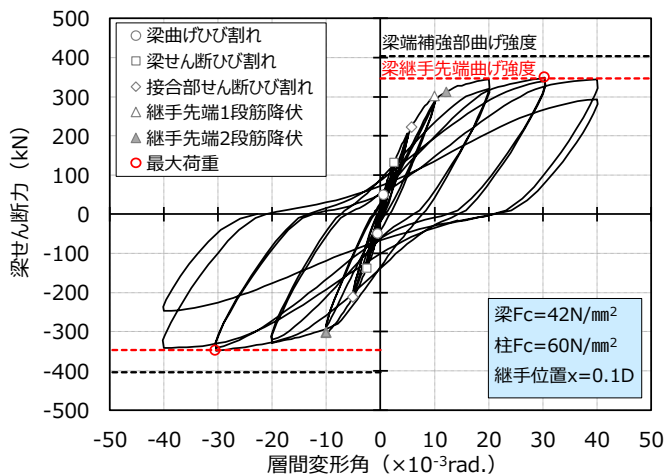
多数の構造実験および解析的検証により、構造性能を確認しました。例えば、十字形骨組実験では、降伏ヒンジは継手先端位置に形成されること、層間変形角1/25rad.まで安定した復元力特性を発揮できることを確認しました。

表 適用範囲

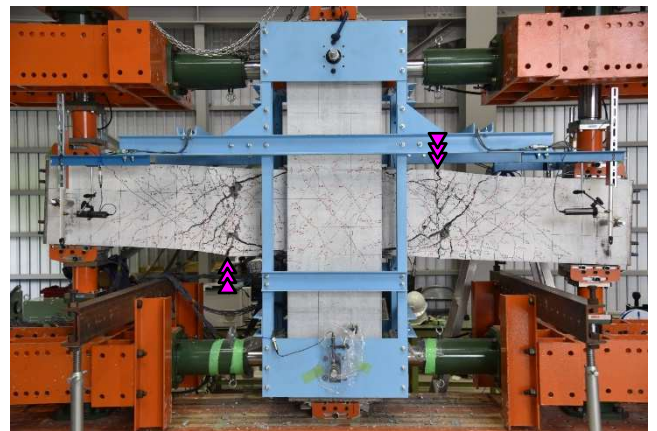
項目	適用範囲
柱梁接合部の形状	十字形
梁コンクリート設計基準強度	60N/mm ² 以下
梁主筋	SD345 ～ SD685
梁せん断補強筋	SD295 ～ SD785
機械式継手の位置 (x)	0.0D ～ 0.3D
梁端補強部と梁一般部の主筋組合せ (①または②)	①継手メーカーのA級継手の評定条件に適合する組合せ ②構造実験で有効性が確認された組合せ

※①の例： NEWボルトトップス（東京鐵鋼㈱） SD490以下で1鋼種2径差

※②の例： 構造実験で有効性確認 SD590以下で1鋼種2径差



十字形骨組実験の荷重変形関係



▽ 降伏ヒンジ位置（継手先端位置）

十字形骨組実験の破壊性状（1/25rad.）

技術の特長

● 施工の合理化・工期短縮

高層鉄筋コンクリート造建物の中柱接合部をプレキャスト化できます。

● 設計自由度が高い

機械式継手は柱面から0.0D～0.3Dの範囲に自由に設置できるため、梁の曲げ強度を調整して、ロングスパンに対応させることも可能です。

● 耐震安全性の向上

ヒンジリロケーションによって降伏ヒンジ位置を柱面から離すことで、見掛けの接合部形状が大きくなるため、接合部内主筋の付着改善や接合部の曲げ降伏防止等の効果が期待できます。

